僕と幻想郷と召喚獣

影月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と幻想郷と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２６５３Ｚ

【作者名】
影月

【あらすじ】
バカテスと東方のコラボです。
明久魔改造、咲夜はＰＡＤじゃない（ここ重要）、文才皆無なんですが頑張ります

挨拶兼補足

初めまして影月です。
このｓｓはバカとテストと召喚獣と東方とちょっとメルブラ要素がある内容です。最初に補足。

主人公は明久。
東方キャラ登場（頑張ります）
お話のメインはバカテス本編
過度のブレイク＆ａｍｐ；キャラ崩壊
メルブラ要素あり
等ございます。お気をつけて下さい。
あとキャラ設定ですが、
明久、咲夜は同じ歳、霊夢、魔理沙と早苗は明久の一つ下となっております。

そして最後に…咲夜はＰＡＤではない！

では次回に（逃亡）

プロローグ1（前書き）

振り分けテスト日の自宅編です。ではどうぞ

プロローグ1

「Ｚｚｚｚ…」
「…ひ…ろ。…久……てば…」
「う…ん？」
「明久、起きろって、今日はテストなんだから、遅刻したらやばいぞ」
「ふ…うあぁぁぁ…なんだ…妹紅か…どうしたの？」
朝、なにやら呼ばれたので起きてみると、目の前に妹紅がいた…
彼女の名前は藤原妹紅。僕の幼馴染で何かと気をかけてくれる少女だ。まぁホントはまだ色々とあるんだけど、それはのちほどに。しかし、妹紅がなぜここにいるんだろう？

「あ、やっと起きた。今日はテストだし一緒に行こうと思ってな。幽香もいるし早く着替えてこいよ」
「え、あ…うん、わかったよ」
「…二度寝すんなよ？」
「しないよ！？」

妹紅が部屋から出て行ったのでとりあえず着替えよう、幽香も来てるらしいし早く行かないとやばい！！

制服に着替えて（間違えても女子の制服じゃないからね！？）リビングに行くと、
「あら、明久おはよう。今日は起きるの遅かったわね」
「幽香おはよう」
声を掛けてきた少女（作者「え？少女（ピチューン」）なんか電波

が聞こえたけど無視しよう…
気を取り直して、彼女の名前は風見幽香。見た目、雰囲気的にもお姉さんって感じだけど同級生である。
実際はというと、彼女達は「幻想郷」ということは違う場所の住人で、妖怪（妹紅は違うけど…）なのである。本当は外に出たりしてはいけないらしいが、僕が原因で幻想郷の外にごく一部だけ出る事が許可されている。
それより・・・

「なんで今日は遅いってわかったの？」
「そこの花から聞いたのよ」
「あ～なるほど」
花から聞いた…聞き様によってはおかしな発言だけど事実である。
彼女達は「～程度の能力」というものを持っており（人間でも持っている人はいる）幽香の能力は「花を操る程度の能力」
その名前の通り、花を操ったり、会話したりできる。
「よし、じゃあご飯作るけど、何かご要望とかはある？」
「「お任せする（するわ）」」

二人を待たせるわけにはいかないし、早く作るかな…

こうしていつもの日常の朝が始まった…でもこの時僕はまだ気づいてなかった…この後僕の運命が決まる重要な事件があることを…

プロローグ１（後書き）

うん…ｇｄｇｄだ…ｏｒｚ
読者様に質問ですが、会話の前に名前をつけたほうがいいですか？
１つけてほしい
２いらないかな
期限は４日ほどでお願いします。

プロローグ2（前書き）

テスト時ですね～ここで明久は運命の扉を開く！！（嘘です
一応ですが幻想郷の事件は東方星蓮船まで行ってる、ということに
なってます。
なんか自分で首しめそう…

プロローグ2

side明久

「…ではテストを開始してください」

さてテストが開始したな…え、その間？普通にご飯食べて、三人で来ましたよ？話がないのは作者が書けてないだけです。（私を見ないでぇぇぇ、てかメタるなあああｂｙ作者）また電波が…

ま、まぁテストに集中しよう…

ガタッ…

「ん？…！？」

椅子が倒れる音がしたので隣を見てみると、床に倒れこんだ少女がいた。たしかあの子は…

「姫路さん！？大丈夫！？」

とりあえず近づいて確認してみるけど…いけない、顔色が悪い熱もありそうだ…

「姫路、試験途中での退席は無得点扱いとなるが、構わんか？」

この教室の担当の教師から出たのは心配とかではなくこんな言葉だった。

「ちょっと先生！？体調を崩してるのにその言葉は…」

「吉井は席に戻りなさい。で、どうする姫路？」

「……退席……します…」

「では姫路、君は無得点だ」

そう言って、教卓に戻ろうとする教師。ちょっ、まさかこの教師倒

れた人間に自分で保健室に行けって言うのか！？
「……しつ…れい…しま…あ…！？」
「！？」
教室を出ようとしたところで、姫路さんがこけそうになったのでとっさにその体を受け止める。
「大丈夫？姫路さん？ほら、掴まって、保健室まで連れて行くから」
「吉井くん…でも…」
「気にしないで」

さすがに、ほっとけないし連れて行こう。

「吉井、何をしている！！早く席につけ！！」
「こんな状態の人を放っておくなんて出来ません！！」
「貴様も、無得点にするぞ！」
「御好きにどうぞ。ここで体調の悪い姫路さんを見捨てる最悪な人間になるくらいなら、無得点になったほうがましです」
「待て、吉井貴様！」

とりあえず、後ろでなんか叫んでるけど無視だ無視。とりあえず姫路さん歩くのもきつそうだし…
「姫路さん、ちょっとごめんね？」
「え？……／／／／／／！？」
ちょっとあれだけど抱えて（俗に言う、お姫様だっこ）行こう。

ｓｉｄｅ明久ｅｎｄ
ｓｉｄｅ妹紅

やっぱ、明久だよな。
自分よりも周りを大事にする…。私もそんなあいつに助けられたし

な…。
（さ～てどうしようかな…）
明久は無得点だし、あいつがいないとこ行ってもつまらないしな…
幽香もそうみたいだし…
いっその事名前無記入で出すかな？

「チッ、屑が…」

そう考えてると、教師があり得ないことをほざいた気が…

「まったく、あのバカの考えてることはわからん。ましてやあの屑ごときが私を侮辱して…」

…うん、聞き間違いじゃないらしいな…

『『ガタッ！！！』』

あら？音が二つ？気になってそっちを見てみると、すっごい笑顔の

幽香が…なるほど考えてることは同じってことだな…

「？何だ藤原、風見、お前たちも無得点になりたいのか！？」

なんか言ってるけどまあいい…

「とりあえず…」

「えぇ、まあとりあえず…」

「な、何だお前たち！？」

「「最悪な屑は、お前だ（貴様よ）」」

『『ドゴン！！！！！！！！』』

「げふ！！？？」

「じゃあ、私も退席しますね」

「私も退席するわ」

なんか力加減ミスった気がするけど、まあいいか死んでないし…

あ…やばい…慧音と明久に怒られるかも…覚悟しなきゃか…ハァ…

ｓｉｄｅ妹紅ｅｎｄ
ｓｉｄｅ明久

なんか教室からすごい音がした気が…気のせいだな…
よし着いた。
「失礼します」
「あら？明久君、どうしたの？」
「永…八意先生いたんですね。すいません急患です」
「そう、じゃあそこのベットに寝かせて」
この人は八意　永林。保健室の先生で、「幻想郷」の医者である（休みには幻想郷に帰ってるみたいだ）。
「うん、普通の熱みたいだし親御さんに連絡すれば大丈夫ね」
「そうですか」
「でも、明久君？テスト中じゃないの？」
「実は……」
とりあえず、さっきあったことを永林に話した…
「ふ～ん…その先生って何て名前？」
「え？～先生です」
「そう…フフフ…」
なんか笑ってるけど目が笑ってない…とりあえず、先生ご愁傷さま。
「で、この後はどうするの？」
「もうテストは受けれないし妹紅と幽香を待とうかと」
「あら、それならお話しましょうか。今暇なのよね」
「そうですね」

とりあえず話してる途中で、妹紅と幽香が来たので事情を聴いたとこ、永林が一層笑っていない笑顔になったことだけはここに記そう。

帰宅後、僕たち3人は慧音から2時間ほど（二人は＋2時間）説教を食らった・・・

プロローグ2（後書き）

おまけ

「でもさ慧音、その教師明久のこと侮辱したんだよ？」

「？どういうことだ？」

「あ～それはね（幽香説明中）……っということよ」

「……ほう、でその教師の名前は？」

「～先生（慧音切れてるな…）」

「（切れてるわね…）」

『プルプルガチャッ』

「あぁ、永林か？慧音だ…実は…ふむなるほど私も参加するとしよう」

「「（ご愁傷さま）」」

後日、この教師は首になったそうだ…（妹紅談

第1話　朝の会合（前書き）

いきなりですが、明久は観察処分者ですが、原因は原作と違います。
でも、周りからの扱いは原作とほぼ変わりません。

第1話　朝の会合

４月…

今日は文月学園の始業式である…

その頃明久は…

「Ｚｚｚｚｚ…」

「…う…ん…Ｚｚｚｚｚ…」

「もう…まだ寝てるのかしら…明久おきなさ…」

「うん？ふあぁ…あ、幽香おはよう」

起きてみると幽香がいたので挨拶したんだけど、何で固まってるんだろう？

「…おはよう。ところでそれ、何？（ニコッ」

「え？（隣を見る）…うんまず、理由言いたいから聞いてくれる？」

「まぁ…聞いてあげるわ…」

隣には昨日一緒にゲームをしていた妹紅が眠っていた…遊び疲れて倒れる形で一緒に寝ちゃったんだろう…

「実は昨日モン〇ン３してて…」

「…何時までしてたの？」

「えっと３時くらいまでは記憶がある」

「……」

「……」

「はぁ、ゲームは構わないけど時間には気をつけなさいって言ってるでしょ…」

「あははは…ごめん…」

「まぁいいわ。日曜日弾幕勝負で許してあげる」

「えっ・・・」

「それとこれとは話は別よ（ニコッ」

「ハイ、ワカリマシタｏｒｚ」
こうして僕は死亡フラグを立てた…

「明久ごめんな。寝くなっちゃってそのまま寝ちゃった…」
「いいよ、夜遅くまで遊んでたのも悪いし、弾幕勝負で済んだだけましだよ…」
朝ご飯を作っている途中、起きてきた妹紅が謝ってきた。でもみんな抱き癖があるのだろうか…幻想郷での宴会後も朝起きたら結構みんな抱きついてきてるし
「あはは、まぁ明久なら大丈夫でしょ」
「ひどいな～僕は普通の人間だよ？」
「…普通の人間が砲撃とかを切ったりしねえよ…まぁかっこいいけどさ…／／／（ボソッ」
「？どうかした？」
いきなり顔赤くしてどうしたんだろう？
「いや／／／何でもない／／／」
「そう？ところでさ…」
やっぱりこれは言わなきゃだよね…

「妹紅…やっぱり男子制服で行く気？」
そうである、妹紅は女子制服ではなく男子制服なのである…
「ん？あ～、うんだってスカートって慣れなくて…それに似合わないし」
「そうか…僕は似合うと思うけどな～」
「あははは／／／まぁその、ありがとう」
「明久、そろそろ食べないと時間危ないわよ～」
「あ、うんわかった。妹紅運ぶの手伝って」
「わかった」
さて、遅刻したらやばいし、早く食べなきゃね。

文月学園前

「おはよう、吉井、藤原、風見」
校門前でスーツを着た先生に出くわした。
「おはようございます、て…西村先生」
「おはようございます、鉄人」
「おはようございます、西村先生」
「あぁ、ところで吉井、今鉄人と言いかけなかったか？あと藤原、西村先生と呼べと言ってるだろう」
「気のせいですよ、先生」
「え？かっこいいと思うけどな…鉄人って」
彼は西村先生。通称、鉄人。趣味がトライアスロンだということからそう呼ばれている。また、補習担当の先生で生徒から鬼の補習をするということから相当恐れられている。
「まぁいい。ほれ、お前たちのクラスわけの結果だ」
結果が書かれた封筒を鉄人が僕と二人に渡してくる。僕と二人は一緒に封筒の口を破く。
「吉井、先生はお前の行動は立派だと思う。結果は残念だったが…」
「いいんですよ、先生。これは僕が選んだことですから。」
「そうか…」
案の定、Fクラスだった。まぁ仕方ないよね、途中退席だし
「しかし、藤原、風見貴様ら教師を殴るとはどういうつもりだ！」
「「あいつが明久のことをバカの屑呼ばわりしたからだ（したからよ）」」
「確かに教師としてはあるまじき発言と行為だが、吉井や上白沢先生たちに迷惑をかけたら意味がなかろう…」
「うっ…それはたしかに…」
「言いごたえ出来ないわね…」

「まぁ今回は罰も受けているから処分はなしだ…吉井と上白沢先生たちに礼を言っとけよ？」
「「…はい」」
「あはは、気にしなくてもいいよ」

「先生、そろそろ自分たちは行きますね」
「んっ、そうか。」
あまり話しこんでると遅刻しちゃうしね

第1話　朝の会合（後書き）

1話まで書けた…一応ですが、宴会時明久は基本酒は飲みません。
まぁ飲んでも酔いませんけどね。あと生活ですが、ゲームは買うけど日常に余裕があるくらいには節約しています。
暮らしとして
幽香　明久　慧音と妹紅
てな感じにアパートに住んでいます。

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ（前書き）

…え？ＰＶ２０００超え…？頑張らないとだな…

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ

Aクラス前

「まだ時間あるし、Aクラス見ていこうぜ」
始まりは妹紅のこの一言だった。
「確かに時間あるし、見ていこうか」
「そうね」
少年少女達移動中…

「……」
「アハハハ…」
「何よこれ…」
目の前には、普通の教室の5倍はある教室だった…
「無駄にお金のかかった教室だね…」
「冷蔵庫とエアコンが個人であるし、ていうか何あの大型ディスプレイ！。それに天井ガラス張りだよ！。」
「格差社会ってやつね」

3人は窓から中を覗くと教壇には知的美人を体現している女性ー学年主任の高橋洋子が立っていた。
「あ、やぱりあの先生が担任なんだ…」
「私あの先生苦手だな…」
「私、間違ってもAクラスじゃなくてよかったかも、って今実感したわ…」
これといって悪い先生ではないのだが、この二人はどうも高橋先生が苦手らしい。
「ははじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来て

きてください。」
「？？？？？？？はい。」
名前を呼ばれ立ったのは黒髪を肩まで伸ばした物静かな少女ー霧島翔子だった
「同性愛者か…」
「「え？」」
霧島翔子は一年生の頃からその容姿で多くの男子から告白されてきた。が、彼女はそれをすべて断ってきた。そのうち彼女は男に興味がないというふうに噂されるようになった。
「いや、霧島さんには同性愛者じゃないかって噂があるじゃない？」
「あ～確かにそうだな」
「それがどうかしたの？」
「いや…僕にはそう思えなくてね…もしかしたらずっと1人の男の子を想い続けているのかもしれないと思ってね」
「「そう…なんでこれで自分のことには気づかないんだろう（のかしら）…（ボソッ」」
「？」
「そろそろ教室行こうか」
僕たちはFクラスの教室に歩き出した。
この時僕は、僕たちを見ている銀髪の少女に気づいていなかった。
「ねぇ…僕たちいつの間に別世界に来たのかな？」
「明久、現実を見てくれ…私だって逃避したいの我慢してるんだから…」
「これは…ひどいわね…」
今僕たちが目にしているのはとても教室とは思えない、それこそ山

奥の山小屋のような教室だった。
「と、とりあえず中に入ろ。きっと外よりはマシだよ。」
「そうだな…」
「そうね」
そう言って、僕は教室のドアを開いた。

『ガラッ』
「おはよ「さっさと席つきやがれ、蛆虫やろう」う？」
なんだろう、この教室。入った第一声罵倒だった…
「って雄二なんで教卓に立ってるの？」
「そりゃ担任が「「蛆虫やろうとは言い根性してるな（わね）…」」
え？」
罵声を浴びせた少年ー坂本雄二はその方に目を向けた。

そこにはもこたn…妹紅とUS…幽香がすごい笑顔で立っていた…
「女の子に対して蛆虫呼ばわりなんて失礼ね…」
「まて、それはお前たちじゃなくて明久のことで…」
「ほう、明久を蛆虫呼ばわりなんて…」
「「覚悟出来てるんだろうな（わよね）？」」
「ち、ちょっと待ってくれ！。言い過ぎた。俺が悪かった！。だから？？？？？？？あ、明久！。助けてくれ！。」
雄二が助けを求めてくる…仕方ない…
「二人とも…」
「「なに？明久」」
「あとでやってもかまわないから、今は席に着こう？」
「「そうだな（そうね）」」
「ち、ちょっと待て明久！？見捨てる気か？！」
雄二は必死に助けを求めるが、
「だって原因雄二じゃん」
僕は切り捨てることにした。

第2話　Aクラスと Fクラスのゴリラ（後書き）

次回のお話は？
とうとう始まった本編、雄二のおとしめようとする策略の明久はどう対抗するのか？
お楽しみに（大ウソです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2653z/

僕と幻想郷と召喚獣

2011年12月10日10時58分発行